

大日本印刷

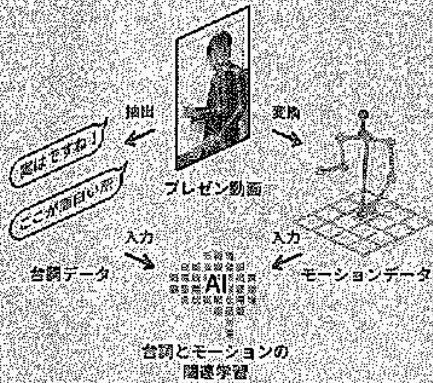
ロボ動作を最適化

AI開発 プレゼンの効果向上

大日本印刷（DNP）は早ければ2018年度にも、プレゼンテーションの内容に応じて効果的にジェスチャーを行えるようにするロボット向け人工知能（AI）を実用化する。一般的なコミュニケーションロボットはプレゼン時の動きに意図がないため、ジェスチャーの効果は薄い。今回のAIはロボットなどに搭載すると、意図的に身ぶり手ぶりをを行い、効果的に物事を伝えられる可能性がある。店頭や美術館などで上手に製品や展覧品を紹介できそうだ。

AIは、入力されたテキスト文章から、プレゼンテーションに最適な動作を生成する。ロボットのほか、パソコンに搭載し、人間の分身となるキャラクター（アバター）でも利用できる。一般的なコミュニケーションロボットでも、プレゼン時に手や顔を動かせるが、その動きに意図がないため、不自然さが残り、人間に比べて物事を伝える力が低いとされる。DNPなどの研究グループはインターネット上に公開されている動画を活用し、米国のプレゼン大会に出場した

160人分の言葉と動作をタイプフーニ



グ（深層学習）で蓄積しAIを開発した。そのAIに文章を与えることで、プレゼン大会の出演者の動作を基に、プレゼンに最適と考えられる動きを生成する。電気通信大学の長井隆行教授、中村友昭助教授と共同で実用化を目指す。今後はロボット

トやアバターにAIを搭載し、AIが生成した動きがプレゼンに効果的かどうかを検証する。これらの成果は人間の言葉や表情、ジェスチャーに合わせて自動的に返答とジェスチャーを生成するAIの開発につながる。実用化した後、AIを単品で販売するか、店舗・店頭などをプロデュースする事業で活用するかを詰める。AIのこうした活用事例は珍しいという。開発が進めば、AIを搭載したロボットやデジタルサイネージ（電子看板）が人間とコミュニケーションを取りつつ、接客などを行える可能性がある。

プレゼンテーションが得意な人の身ぶり手ぶりをまねしたら、ロボットも上手なプレゼンができるようになるのでは。米国には、世界中から登壇者が集うプレゼンテーション大会がある。その大会の出場者の言葉や動きをロボットなどに取り入れて、上手なプレゼンテーションを可能にする人工知能(AI)の開発が進んでいる。

大日本印刷 プレゼンテーションAI

大日本印刷(DNP) 今後は開発したAIを電気通信大学の長井隆二教授、中村友助教授、コミュニケーションロボットやアバターなどに搭載すれば、上手なプレゼンテーションができるようになるが期待されている。研究グループは、インターネットで公開されている動画を、米国のプレゼンテーション大会に出場した160人分の言葉と動きをAIに学習させた。そのAIに文章を与えれば、適切なスチリースチアを自動で生成する。



上級者の言葉や動作映す

DNPは、早ければ2020年度にも実用化する考えだ。一般的なコミュニケーションロボットは、AIが効果的でないことが多かった。DNPのICT事業開発本部の屋敷紀生主任研究員は、「動きの意味や間の

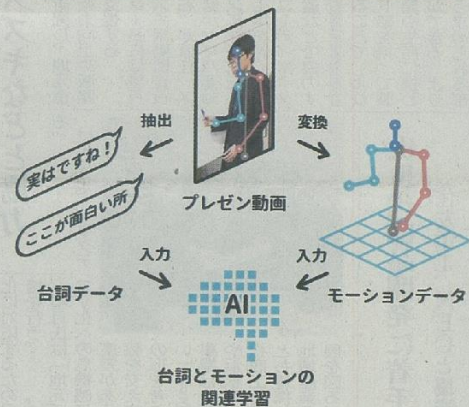
取り方が重要になる」と力を込める。注目してほしい部分で、ロジックタに手を向けたり、発表を聞く人が分りづらそうなる反応をしたら詳しく解説したり、時にはジョークをきかんだりといった配慮は、一般的なロボットのには難しい。

だがプレゼンテーションの上級者たちの言葉や動作を集めたAIが完成すれば、そうした課題も解決できる。開発したAIについては、将来は人間の表情なども読み取れるようにする考えだ。その上で店頭

店頭ロボ・電子看板に商機



プレゼンロボットに任せたい日が来るかもしれない(大日本印刷提供)



開発を進めるAIのイメージ(大日本印刷提供)

(福沢尚季)

このほかにもDNPはAI inside(東京都渋谷区)や丸善CH Iホールディングスと連携し、AIの活用を進めている。業務受託(BPO)事業をはじめ、書店のデータ分析にAIを活用するのが狙いだ。開発が進めば、物流や小売りなど、AIやロボットの活躍の場が広がると期待されている。